



学校名:多摩市立大松台小学校

氏名: 濱元 徹美

[担当教科:全科]

● 実践教科等: 道徳、学活

● 時間数 : 5時間

● 対象生徒 : 第三学年

● 対象人数 : 29 人

1 単元名

わたしとモンゴルと世界と

2 単元の目標

- ・モンゴル文化や生活等を通して、世界中の様々な国にはそれぞれの文化があることを知り、他国の文化を尊重する態度を育む。
- ・他国の文化を知り認め合う心情を育てると共に、自国の文化について興味関心を深める。
- ・日本の国際協力活動について知り、異なる文化をもつ人々と一緒に活動したり、協力したりする態度や心情を育てる。

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性		公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	--	-----	-----	-----

- ・モンゴルの自然や文化を知ること、世界には様々な文化や価値観があることに気付く。(多様性)
- ・その土地の文化や価値観は、その土地の風土や環境と関わりあっていることに気付く。(相互性)
- ・日本とモンゴルのつながりや、日本と他国が関わりあっていることを知る。(連帯性)

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・学習活動として、児童が自分で文化の違いや多様性に気付いたり、考えたり、興味を深めたりできるように視覚的資料を用いた。
- ・他者の意見を尊重したり、共同的に学んだりできるようにグループ学習でフットラングージを行い、自分の考えを持つとともに、他者の考えも共感し受け入れるようにした。
- ・授業の振り返りのときに「違っているところ・似ているところ」という視点でワークシート記入し、多様性や相互性、日本とモンゴル、日本と外国との連帯性を意識できるようにした。

(2)児童観

事前のアンケートでは、「知っている外国の名前」という質問では、平均で7カ国の国を知っている。アメリカ、中国、韓国を上げる児童が多かった。ちなみにモンゴルと書いたのは一名のみ。「外国に行ってみたいですか」という質問では、29名中17名が行きたいと答えた。約59パーセントの児童が外国に行ってみたいという結果である。「外国で生活してみたいですか?」という質問では、生活したいと答えた児童は、29名中8名で約28パーセントという結果であった。「ジャイカを知っていますか」という質問では、知っている児童は一人もいなかった。

(3)指導観

児童はモンゴルについての知識はほとんどないため、学ぶことが新鮮に感じられる状況を生かし、発見のある授業にしていきたいと考えた。また、日本とモンゴルとの違うところ、似ているところを比較しながら考えることで他国を理解すると共に、自国にも興味を深め、世界の国々はつながっているということを感じることができるよう考えた。

また、三年生という発達段階を考え、モンゴルで手に入れた教材(民族衣装、紙幣、ゲルの模型等)

を教室展示して、児童が見たり、触ったりできるよう工夫した。さらに、現地で撮影した写真や映像、青年海外協力隊の方のインタビュー映像、現地の通訳でもあるモンゴル人の方へのインタビュー映像を授業の中で取り入れて、イメージを持たせやすくした。

そして、モンゴルのことだけではなく、世界中の国に興味や関心を持たせるため、世界中のくらしの写真をもとにフォトランゲージを行いそれぞれの国の文化を尊重し理解できるように考えた。

5 評価基準

観点	1 関心・意欲・態度	2 国際理解
評価規準	・モンゴルの文化に親しみ興味を持って取り組もうとしている。(1-1) ・友だちと協力して取り組もうとしている(1-2) ・国際協力について関心を持って取り組もうとしている。(1-3)	・モンゴル文化知り、尊重し理解し認めようとしている。(2-1) ・日本とモンゴル。日本と世界の関わりについて知る。(2-2) ・国際協力について知る。(2-3)
評価方法	発言 ワークシート 授業への参加態度	ワークシート 授業への参加態度

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルの人々の生活について	異文化を理解しようとする力、多様性を認め合おうとする心情を育てる。	モンゴルの人々の暮らしと自分たちの暮らしを比べて考えさせる。
2	モンゴルの小学生の生活について	日本とモンゴルの生活の違いや共通点を身近に感じ相互性や多様性を理解する。	モンゴルの小学生の生活を知り、モンゴルをみじかに感じ、自分の暮らしと比べながら、考える。
3	世界の人々の暮らしについて	世界の人々の暮らしに興味をもち多様性を育てる。	世界の人々の暮らしについて考える。
4	他国でボランティアする気持ちを考えよう	他国を尊重しながら、ボランティアするときの心情について考える。	青年海外協力隊の活動から、他国でボランティアするときに必要なことは何か考える。
5	モンゴルの文化や歴史を知ろう。	他国文化を尊重し認め、自然、文化の多様性、有限性を理解する。	モンゴルの文化を通して他国の文化に興味をもち世界の文化にも興味を広げ多様性を育てる。

7 授業事例の紹介

小単元名【他国でボランティアする気持ちを考えよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月9日(水)第5限

(イ)実施会場 3年3組 教室

(ウ)本時の目標

青年海外協力隊の活動を知り、他国でボランティアするときに何が大切なのか考える

(エ)指導のポイント

青年海外協力隊員が大切にしていることを知り、ボランティアについて深く考えさせる

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5分	JICAについての簡単な説明。	JICAについて知る。	一斉	JICAの活動内容を児童に理解できるように説明する。	国際協力について知る (2-3)
10分	JICAのモンゴルでの活動を紹介する。	モンゴルでのJICA活動を理解する。 		児童には日本の良さを生かして国際協力を行っていること、相手国が自立できるように支援していることに気づかせる。	
10分	青年海外協力隊のモンゴルでの活動を紹介する。	モンゴルでの青年海外協力隊の活動を理解する。		それぞれの協力隊の思いや持ち味を生かした活動であることに気付かせる。	国際協力について関心をもって取り組む (1-3)
10分	JICAや青年海外協力隊の活動でどんなことを大切にしているのか	他国でボランティアしている中で大切なことは何か考える。 	個人	相手を気持ちを尊重しながらボランティアをすることに気付かせる。	
5分	自分自身を見つめる。	自分の考えを伝えたり、友だちの考えを聞いて共有する。	ペア	普段の学校生活や児童の身近な生活から考えさせる。	
5分	本時をふりかえる。	本時を振り返る。 	個人	学習したことを振り返り普段の生活に結びつけさせる。	

(2) 授業の振り返り

- ・今回の海外研修で学んだ JICA の取り組みと青年海外協力隊の活動を写真や動画を使って紹介することで、児童は臨場感をもって日本の国際協力活動を知ることができた。
- ・青年海外協力隊の方の活動を詳しく知ることやインタビューを通して、隊員の方が大事している思いを知ること、相手の気持ちを考えてボランティアすることの大切さを学習できた。

(3) 使用教材

- ① 無償資金協力事業視察小学校、ゲル地区、ソングノハイルハン地区ブリーフィング、保険卒業研修プロジェクト、モンゴル日本人材センター、新モンゴル高校、淡水資源自然保護センター、トゥブ県スポーツ委員会、新空港建設サイト、スジャータシャンド、獣医プロジェクト、オルホン渓谷の写真
→第一時でどこの国なのかを考えさせるために活用した。
- ② ゲル地区の小学校視察での写真、動画、校長先生へのインタビュー
→モンゴルの小学生の生活を考えることに活用した。
- ③ JICA での事前研修で行ったフォトランゲージ
→世界の国々の写真を見せてモンゴルだけではなく、世界の国々についてグループでフォトランゲージすることに活用した。
- ④ 現地の青年海外協力隊の方のインタビュー
→協力隊の活動紹介への活用、ボランティアする気持ちを考えさせるために活用した。
- ⑤ オルホン渓谷での写真、ゲルの中の映像、馬頭琴の演奏、通訳さんのインタビュー
→モンゴルの文化を深く知る学習に楽しく活用できた。

(4) 参考資料等

- ・外務省世界いろいろ雑学ランキング <http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/ranking/> (2015 10 月 30 日)
- ・世界ランキング世界経済のネタ帳 <http://ecodb.net/ranking/> (2015 10 月 30 日)
- ・外務省世界の学校を見てみよう <http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/> (2015 10 月 30 日)
- ・開発教育協会 http://www.dear.or.jp/book/book01_hungryplanet.html (2015 10 月 31 日)

8 単元をととした児童の反応/変化

- ・単元のはじめの方では、写真のスライドを多く見せた。はじめは、ウランバートルの都会の写真から見せると子供達は、横浜？などという声が多かった。徐々に、スライドを進めると、町の様子から外国であることに気づき、子供達の発言では、アジアの国を上げることが多く、とても鋭い感性をもっていることに感心した。草原やゲルのスライドを見せるとモンゴルであることに気づきいた。その過程で様々な文化の融合や国と国の連帯性を感じることができたのではないかと考える
- ・次に、モンゴルの小学生の生活を考えることで、他国の文化に興味をもって考えさせた。その国の抱える課題について児童自身の生活と比べながら考えることができた。
- ・次に、世界の暮らしについて、フォトリーディングで考えさせた。モンゴルを通して世界にも目を向させたい。モンゴルのことだけではなく、世界の国々にも興味や関心を持たせ、それぞれの国の文化の特徴を理解し認め合えるようにしたかった。児童は6つの異なる地域の写真をもとに、そこで暮らす人々がどんな生活をしているのか、どんなことを大切にしているのか、どんな問題があるのか写真から想像して考えた。写真に現れている文化的な特徴に気付き、より良く考えることができた。



児童のフォトリーディング

児童の感想 日本とモンゴルについて

ふりかえり
モンゴルは日本語もべん強にいたり山まで家がぎっしりあって
日本とはまったくちがった

ふりかえり
モンゴルはすごく広くてちがう
所がタタいて。

国際協力活動について

ふりかえり
ボランティアを
モンゴルのところに行く人たちは、人のこ
とも考えてしてるてことが分かった。

ふりかえり
みんなを助けたという気持ちがよかった。

ふりかえり
日本でもモンゴルにボランティア
にいかっかくしていることがわかった。

日本からはそんなに多くの
ボランティアがいてことが
わかりました。

ふりかえり
日本人はモンゴルの命をたい
せつにしている

ふりかえり
三人の意見を聞いて、次にやさしく、人の事を考え
ている』という言葉につながる言葉だと思
いました。わたしも心にこの言葉を入れてボラン
ティア』をしたいところになりました。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

- P 国際理解教育には興味があったが、実践したことはなかった。教師海外研修をきっかけにして
いきたいと思って参加した。国際理解教育や開発教育とは何か調べて事前学習をした。授業
構成、授業手法の研修に参加して理解を深めた。
- D 似ているところと違うところを中心に写真をとった。児童に興味をもってもらえることや、理解でき
ること、驚くことを中心に質問したり、写真を撮ったり、動画を写したりすることを心がけた。教師
自身が文化について興味関心が高まり、さらに他の国はどうなっているのか興味が広がった。
また、JICA の活動や青年海外協力隊の活動と現場で視察したり、話を伺ったりすることで私自
身、国際協力活動について深く知ることができた。
- C 旅行ばなしにならないように気をつけた。できる限り児童に気付かせる授業手法を学び研修や
書籍や JICA の資料を活用した。児童の反応や興味をつかむことに不安があったので、事前授
業を行ったりした。児童が授業中に活動的にいられるように工夫することが難しかった。何より海
外研修で経験したことや学んだことを生かして授業をしたいと考えた。授業する際に、子供が主
体的に活動できる授業づくりを考え、実践しようとしたが、発達段階を理解して授業することは
難しく、ゴールの設定も難しかった。今回の三学年で国際理解教育を実践できた経験を次に生
かしたい。
- A 私自身、国際理解教育、開発教育をより学習していく気持ちが芽生えた。また、モンゴルだけ
ではなく他国の文化にも興味が広がった。

10 教師海外研修に参加して

研修を終えて改めて感じたことが五つあります。

一つ目は、国際理解教育、開発教育の必要性を感じました。今回、海外で研修させていただき、自分の身をもって体験することで、自分の視野が広がりました。今まではずっと日本で生活し、海外旅行や留学経験も少なかったので、国際理解に関しても実感がありませんでした。モンゴルで研修させていただき、私自身が国際理解教育に興味を深めることができました。子供たちにも、この研修で体験した感覚を伝え、興味をもってもらいたいと強く思いました。

二つ目は、発展途上国が置かれている状況、国際協力の現場で起きている現状を実感することができました。今までは、ODA の活動はパンフレットや雑誌で知ってはいましたが、実感を伴うものではなく、子供たちに教える時にも深みがありませんでした。今回の研修で、JICA が取り組んでいる事業や青年海外協力隊の活動を生で見ることができました。ODA の活動を深く感じることができ、とても貴重な体験ができたと思います。子供たちにも、自信を持って伝えることができると感じました。

三つ目は、開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について実感することができました。日本人が他国と一緒に手を取り合って援助しようとしている活動を見ることができ感動しました。日本の援助の良さを改めて感じることができました。学校でも、協力してやり遂げる良さや、一緒に取り組んで頑張ろうとする良さをこれまで以上に自信を持って伝えることができると思いました。また、そのような力は世界に貢献できることを伝えていきたいと思いました。

四つ目は、国際協力及び JICA の概要を理解することができました。モンゴルが援助した後も自立して活動出来るように援助を行っているということが大切であることを実感しました。17 番小学校の無償資金協力事業視察やソングノハイルハン地区の教育、文化課長ブリーフィング、モンゴル日本人材センターの技術協力サイト、保健卒後研修プロジェクト、新モンゴル高校の篠原隊員の活動視察、淡水資源、自然保護センターの無償協力支援事業施設、新空港建設サイトの円借款プロジェクトサイト見学、トゥブ県スポーツ委員会河村隊員の活動視察、Save the children Japan 事業視察、スジャータシャンド吉田隊員の活動視察、SATREPS の技術協力プロジェクト視察のどれを通してでもモンゴルの文化や習慣を尊重しながら、手を取り合って援助をしていることを感じました。

最後に、今回、この報告書には書ききれないほどの学びがたくさんありました。教師海外研修では、同行した JICA の方々をはじめ、一緒に研修を行った仲間からも多くのことを学ぶことができたと思います。教師としても、人間として大きく成長することができたと感じています。このような機会をいただいて本当に感謝しています。この研修を生かして、さらに成長し続けることが大切であると改めて感じました。